

小学生高学年の時、「十戒」という映画が封切られた。モーゼなる人物が10の戒めを神から直接授かるという。それがユダヤ教の基本となり、キリスト教にも大きな影響を与えたと教えられた。また、映画は総天然色かつシネマスコープという巨大スクリーンで、クライマックスには、海が二つに割れるすごいシーンがあるという。当時の日本の当たり映画「ゴジラ」（白黒）とは比べようがないほど、迫力があるらしい。



当時、テレビで海外の映画やドラマをむさぼり見ていた。また、時々連れて行ってもらった洋画。すべてが面白かった。それらから知った欧米の、特にアメリカの豊かでスケールのでかい世界に驚き、羨ましく感じた。フレッド・マクマレーの「パパ大好き」や「ビーバーちゃん」などのホームドラマでは、アメリカの一般家庭の生活の豊かさ、大きな家と広い庭、ステーションワゴン、大きなテレビを見ながらと家族で過ごす居間、冷蔵庫も巨大で牛乳瓶だって日本の5倍ぐらいあることを知った。なぜ、アメリカはあのように豊かで、日本は貧しいのか。戦争に負けたからだけではないだろう。何か秘密があるはずだ。

白人はすべてが敬虔なキリスト教徒であり、日曜日には家族そろって教会に行き、神父（牧師？）からためになる説話を聞いていると信じていた。日本のお寺や神社に行っても、ただ拝み、お賽銭をあげるだけで、何も学べない。私は、キリスト教がその秘密を解く鍵に違いないと考えた。この映画はぜひでも観なくてはならないと思い、親に頼んで映画を観に行った。



主演はモーゼのチャールトン・ヘストン、敵役のファラオ（エジプト王）はユル・ブリンナー、女優の名前は憶えていない。スクリーンは大きく、ストーリーもテンポよく展開し、食い入るように見ていた。いよいよ、シナイ山で、モーゼが神から「10の戒め」を石板にイナズマで刻んでもらうシーン。どんな素晴らしい戒めなのだろう。

最初の4つは、神は一つであるとか、偶像を造るなどかの宗教の話であったが、5番目以降は、「父母を敬え」「人を殺すな」「姦淫するな」(当時意味理解できず)「盗むな」「嘘をつくな」「人のものを欲しがらな」であった。なんだこれは。小学生の私でも知っている当たり前のことだろう。なんでこんな当たり前のことをわざわざ神がもったいぶって教えるのか。教えなければ盗む、殺す、嘘をつくのか、白人は。

海が二つに割れるシーンは凄かった。どうやって撮影したんだろう。海水にのまれもがくエジプト兵士たちは本当に死んだのではなかろうか。確かに退屈しないすごい映画であった。子供心にも、映画史に残る傑作であることはよくわかった。でも、「神の戒め」についての疑問は、私の小さな頭に強く焼き付いた。

その後、60年がたち、日本は豊かな国になった。豊かさについては、まさにそのプロセスを生きてきて十分理解できた。白人については、いや正確には人間については、歴史や文学、実体験から多くを学んできたが、エジプトの時代から、人間の本質がまったく変わっていないことに気づいたのは、私がいくつの時だったか。

世界のニュースを観ていると、あいも変わらず、国家、宗教、民族の対立、争いが続いているが、何かきな臭さが強くなっていると感じる今日この頃である。今こそ、もう一度、神が現れ、5番目以降の「戒め」を石板ではなく、世界の人々、特に、国のリーダーたちの心に刻んで欲しいものである。

- \* 「十戒」は、旧約聖書の「創世記」に続く2番目の「出エジプト記」が原作です。
- \* 「総天然色」とは、当時のカラー映画の呼称です。
- \* 「シネマスコープ」とは、フィルムの幅が70mm(普通は35mm)で、横長のスクリーンで上映し、普通の映画館では上映できなかった。この映画は正確には、ヴィスタヴィジョンというものです。

\* 「十戒」

原題 「Ten commandments」 1956年

製作・監督 セシル・B・テムル

ジョン・フォードに並ぶ大監督 この「十戒」が最後の映画

出演 チャールトン・ヘストン、ユル・ブリンナー、アン・バクスター

なお、後年スターとなったロバート・ヴォーン(ナポレオン・ソロ)、マイク・コナーズ(タイトロープ)が端役で出ていたそうです。